

# 煙草と悪魔

芥川龍之介

青空文庫



煙草たばこは、本来、日本になかつた植物である。では、何時頃いつ、舶載されたかと云ふと、記録によつて、年代が一致しない。或は、慶長年間と書いてあつたり、或は天文年間と書いてあつたりする。が、慶長十年頃には、既に栽培が、諸方に行はれてゐたらしい。それが文禄年間になると、「きかぬものたばこの法度はつとぜにはつと法度、玉のみこゑにげんたくの医者」と云ふ落首らくしゆが出来た程、一般に喫煙が流行するやうになつた。――

そこで、この煙草は、誰の手で舶載されたかと云ふと、歴史家なら誰でも、葡萄牙人ポルトガルとか、西班牙人スペインとか答へる。が、それは必ずしも唯一の答ではない。その外にまだ、もう一つ、伝説とし

ての答が残つてゐる。それによると、煙草は、悪魔がどこからか持つて来たのださうである。さうして、その悪魔なるものは、天主教の伴天連ばてれんか（恐らくは、フランシス上しやうにん人）がはるばる日本へつれて来たのださうである。

かう云ふと、切支丹宗門きりしたんの信者は、彼等のパアテルを誣しひるものとして、自分を咎とがめようとするかも知れない。が、自分に云はせると、これはどうも、事実らしく思はれる。何故と云へば、南蛮の神が渡来すると同時に、南蛮の悪魔が渡来すると云ふ事は——西洋の善が輸入されると同時に、西洋の悪が輸入されると云ふ事は、至極、当然な事だからである。

しかし、その悪魔が実際、煙草を持つて来たかどうか、それは、

自分にも、保証する事が出来ない。尤もアナトオル・フランスの書いた物によると、悪魔は木犀草もくせいさうの花で、或坊さんを誘惑しようとした事があるさうである。して見ると、煙草を、日本へ持つて来たと云ふ事も、満更嘘だとばかりは、云へないであらう。よし又それが嘘にしても、その嘘は又、或意味で、存外、ほんとうに近い事があるかも知れない。——自分は、かう云ふ考へで、煙草の渡来に関する伝説を、ここに書いて見る事にした。

\*

\*

\*

天文十八年、悪魔は、フランシス・ザヴィエルに伴ついてゐる伊い

留満るまんの一人に化けて、長い海路を恙つつがなく、日本へやつて来た。この伊留満の一人に化けられたと云ふのは、正しやうぶつ物のその男が、阿媽港あまかはか何処どこかへ上陸してゐる中に、一行をのせた黒船が、それとも知らずに出帆をしてしまつたからである。そこで、それまで、帆桁ほげたへ尻尾をまきつけて、倒さかさまにぶら下りながら、私ひそかに船中の容ようす子を窺つてゐた悪魔は、早速姿をその男に変へて、朝夕フランシス上人に、給仕する事になつた。勿論、ドクトル・ファウストを尋ねる時には、赤い外ぐわいたう套すわを着た立派な騎士に化ける位な先生の事だから、こんな芸当などは、何でもない。

所が、日本へ来て見ると、西洋にゐた時に、マルコ・ポオロの旅行記で読んだのとは、大分、容子がちがふ。第一、あの旅行記

によると、國中至る処、黄金がみちみちてゐるやうであるが、どこを見廻しても、そんな景色はない。これなら、ちよいとくるす磔を爪でこすつて、金きんにすれば、それでも可成かなり、誘惑が出来さうである。それから、日本人は、真珠か何かの力で、起死回生の法を、心得てゐるさうであるが、それもマルコ・ポオ口の嘘らしい。嘘なら、方々の井戸へ唾を吐いて、悪い病さへ流行はやらせれば、大抵の人間は、苦しまぎれに当来の波羅はらいそ韇僧などは、忘れてしまふ。——フランスス上人の後へついて、殊勝らしく、そこいらを見物して歩きながら、悪魔は、私ひそかにこんな事を考へて、独り会心の微笑をもらしてゐた。

が、たつた一つ、ここに困つた事がある。こればかりは、流石さすが

の悪魔が、どうする訳にも行かない。と云ふのは、まだフランス・ザヴィエルが、日本へ来たばかりで、伝道も盛にならなければ、切支丹の信者も出来ないの、肝腎かんじんの誘惑する相手が、一人もゐないと云ふ事である。これには、いくら悪魔でも、少からず、当惑した。第一、さしあたり退屈な時間を、どうして暮していいか、わからない。――

そこで、悪魔は、いろいろ思案した末に、先園芸まづでもやつて、暇をつぶさうと考へた。それには、西洋を出る時から、種々雑多な植物の種を、耳の穴の中へ入れて持つてゐる。地面は、近所の畠でも借りれば、造作はない。その上、フランスス上人さへ、それは至極よからうと、賛成した。勿論、上人は、自分についてゐ



る伊留満いるまんの一人が、西洋の薬用植物か何かを、日本へ移植しようとしてゐるのだと、思つたのである。

悪魔は、早速、鋤すきを借りて来て、路ばたの畠を、根気よく、耕しはじめた。

丁度水蒸気の多い春の始で、たなびいた霞かすみの底からは、遠くの寺の鐘が、ぼうんと、眠むさうに、響いて来る、その鐘の音が、如何にも又のどかで、聞きなれた西洋の寺の鐘のやうに、いやに冴えて、かんと脳天へひびく所がない。——が、かう云ふ太平な風物の中ちゆうにゐたのでは、さぞ悪魔も、気が楽だらうと思ふと、決してさうではない。

彼は、一度この梵鐘ぼんしやうの音を聞くと、聖保羅さんぼろの寺の鐘を聞

いたよりも、一層、不快さうに、顔をしかめて、むしやうに畑を打ち始めた。何故かと云ふと、こののんびりした鐘の音を聞いて、この曖々たる日光に浴してゐると、不思議に、心がゆるんで来る。善をしようと思ふ氣にもならないと同時に、悪を行はうと思ふ氣にもならずにしてしまふ。これでは、折角、海を渡つて、日本人を誘惑に來た甲斐がない。——掌てのひらに肉豆まめがないので、イワンの妹に叱られた程、労働の嫌な悪魔が、こんなに精を出して、鋤を使ふ氣になつたのは、全く、このややもすれば、体にはひかかる道徳的の眠けを払はうとして、一生懸命になつたせりである。

悪魔は、とうとう、数日の中に、畑打ちを完つて、耳の中の種を、その畦うねに播まいた。

\*

\*

\*

それから、幾月かたつ中に、悪魔の播いた種は、芽を出し、茎をのばして、その年の夏の末には、幅の広い緑の葉が、もう残りなく、畑の土を隠してしまつた。が、その植物の名を知つてゐる者は、一人もない。フランスス上人が、尋ねてさへ、悪魔は、にやにや笑ふばかりで、何とも答へずに、黙つてゐる。

その中に、この植物は、茎の先に、そうそう簇々として、花をつけた。じやうご漏斗のやうな形をした、うす紫の花である。悪魔には、この花のさいいたのが、骨を折つただけに、大へん嬉しいらしい。そこで、

彼は、朝夕の勤ごんぎやう行をすましてしまふと、何時でも、その畑へ来て、余念なく培養につとめてゐた。

すると、或日の事、（それは、フランスス上人が伝道の為に、数日間、旅行をした、その留守中の出来事である。）一人の牛うしあ商人が、一頭の黄牛あめうしをひいて、その畑の側を通りかかった。

見ると、紫の花のむらがつた畑の柵の中で、黒い僧服に、つばの広い帽子をかぶつた、南蛮の伊留満が、しきりに葉へついた虫をとつてゐる。牛商人は、その花があまり、珍しいので、思はず足を止めながら、笠をぬいで、丁寧ていねいにその伊留満へ声をかけた。

——もし、お上人様、その花は何でございます。

伊留満は、ふりむいた。鼻の低い、眼の小さな、如何にも、人

の好きさうな紅毛こうまうである。

——これですか。

——さやうでございます。

紅毛は、畑の柵によりかかりながら、頭をふつた。さうして、なれない日本語で云つた。

——この名だけは、御気の毒ですが、人には教へられません。

——はてな、すると、フランス様が、云つてはならないとでも、仰おつしや有つたのでございますか。

——いいえ、さうではありません。

——では、一つお教へ下さいませんか、手前も、近ごろはフランス様の御教化をうけて、この通り御宗旨に、きえ帰依して居りま

すのですから。

牛商人は、得意さうに自分の胸を指さした。見ると、成る程、小さな真鍮しんちゆうの十字架が、日に輝きながら、頸くびにかかつてゐる。すると、それが眩まぶしかつたのか、伊留満いるまんはちよいと顔をしかめて、下を見たが、すぐに又、前よりも、人なつこい調子で、冗談じようだんともほんとうともつかずに、こんな事を云つた。

——それでも、いけませんよ。これは、私の国の掟おきてで、人に話してはならない事になつてゐるのですから。それより、あなたが、自分で一つ、あててごらんさい。日本の人は賢いから、きつとあたります。あたつたら、この畑にはえてゐるものを、みんな、あなたにあげませう。

牛商人は、伊留満が、自分をからかつてゐるとでも思つたのであらう。彼は、日にやけた顔に、微笑を浮べながら、わざと大仰に、小首を傾けた。

——何でございますかな。どうも、殺急さつきふには、わかり兼ねますが。

——なに今日でなくつても、いいのです。三日の間に、よく考へてお出でなさい。誰かに聞いて来ても、かまひません。あたつたら、これをみんなあげます。この外にも、珍陀ちんたの酒をあげませう。それとも、波羅葦僧埵利阿利はらいそてれあるの絵をあげますか。

牛商人は、相手があまり、熱心なのに、驚いたらしい。

——では、あたらなかつたら、どう致しませう。

伊留満は帽子をあみだに、かぶり直しながら、手を振つて、笑つた。牛商人が、聊、意外に思つた位、鋭い、鴉のやうな声で、笑つたのである。

——あたらなかつたら、私があなたに、何かもらひませう。賭です。あたるか、あたらないかの賭です。あたつたら、これを見んな、あなたにあげますから。

かう云ふ中に紅毛は、何時か又、人なつこい声に、歸つてゐた。——よろしうございます。では、私も奮発して、何でもあなたの仰有るものを、差上げませう。

——何でもくれますか、その牛でも。

——これでよろしければ、今でも差上げます。



牛商人は、笑ひながら、あめうし黄牛の額を、撫でた。彼はどこまでも、これを、人の好い伊留満の、冗談だと思つてゐるらしい。

——その代り、私が勝つたら、その花のさく草を頂きますよ。

——よろしい。よろしい。では、確に約束しましたね。

——確に、おやくぢやう御約定致しました。おんあるじ御主エス・クリストの御

名にお誓ひ申しまして。

伊留満は、これを聞くと、小さな眼を輝かせて、二三度、満足さうに、鼻を鳴らした。それから、左手を腰にあてて、少し反りそ身になりながら、右手で紫の花にさはつて見て、

——では、あたらなかつたら——あなたの体と魂とを、貰ひますよ。

かう云つて、紅毛は、大きく右の手をまはしながら、帽子をぬいだ。もぢやもぢやした髪の毛の中には、山羊やぎのやうな角つのが二本、はえてゐる。牛商人は、思はず顔の色を変へて、持つてゐた笠を、地に落した。日のかげつたせみであらう、畑の花や葉が、一時に、あざやかな光を失つた。牛さへ、何におびえたのか、角を低くしながら、地鳴りのやうな声で、唸つてゐる。……

——私にした約束でも、約束は、約束ですよ。私が名を云へないものを指して、あなたは、誓つたでせう。忘れてはいけません。期限は、三日ですから。では、さやうなら。

人を莫迦ばかにしたやうな、慇懃いんぎんな調子で、かう云ひながら、悪魔は、わぎと、牛商人に丁寧なおじぎをした。

\*

\*

\*

牛商人は、うつかり、悪魔の手にのつたのを、後悔した。この  
 ままで行けば、結局、あの「ぢやぼ」につかまつて、体も魂も、  
 「亡ほろぶることなき猛みやうくわ火」に、焼かれなければ、ならない。そ  
 れでは、今までの宗旨をすてて、波は宇う寸す低ち茂もをうけた甲斐が、な  
 くなつてしまふ。

が、御おんあるじ主エス・クリスト耶蘇基督の名で、誓つた以上、一度した約束は、  
 破る事が出来ない。勿論、フランスス上人でも、ゐたのなら、ま  
 たどうにかなる所だが、生あいにく憎、それも今は留守である。そこで、

彼は、三日の間、夜の眼もねずに、悪魔の巧みの裏をかく手だてを考へた。それには、どうしても、あの植物の名を、知るより外に、仕方がない。しかし、フランスス上人でさへ、知らない名を、どこに知つてゐるものが、ゐるであらう。……

牛商人は、とうとう、約束の期限の切れる晩に、又あの黄<sup>あめうし</sup>牛をひつぱつて、そつと、伊留満の住んでゐる家の側へ、忍んで行つた。家は畑とならんで、往来に向つてゐる。行つて見ると、もう伊留満も寝しづまつたと見えて、窓からもる灯さへない。丁度、月はあるが、ぼんやりと曇つた夜で、ひつそりした畑のそこそこには、あの紫の花が、心ぼそくうす暗い中に、ほのめいてゐる。元来、牛商人は、<sup>おぼつか</sup>覚束ないながら、一策を思ひついて、やつと

ここまで、忍んで来たのであるが、このしんとした景色を見ると、何となく恐しくなつて、いつそ、このまま歸つてしまはうかと云ふ氣にもなつた。殊に、あの戸の後では、山羊のやうな角のある先生が、いんへるの因辺留濃の夢でも見てゐるのだと思ふと、折角、はりつめた勇氣も、意氣地なく、くじけてしまふ。が、体と魂とを、「ぢやば」の手に、渡す事を思へば、勿論、弱い音ねなぞを吐いてゐるべき場合ではない。

そこで、牛商人は、びるぜんまりや毘留善麻利耶の加護を願ひながら、思ひ切つて、あらかじめ予、もくろんで置いた計画を、実行した。計画と云ふのは、別でもない。——ひいて来た黄牛の綱はづなを解いて、尻をつよく打ちながら、例の畑へ勢よく追ひこんでやつたのである。

牛は、打たれた尻の痛さに、跳ね上りながら、柵を破つて、畑をふみ荒らした。角を家の板目はめにつきかけた事も、一度や二度ではない。その上、蹄ひづめの音と、鳴く声とは、うすい夜の霧をうごかして、ものものしく、四方あたりに響き渡つた。すると、窓の戸をあけて、顔を出したものがある。暗いので、顔はわからないが、伊留満に化した悪魔には、相違ない。気のせみか、頭の角は、夜目ながら、はつきり見えた。

——この畜生、何だつて、己おれの煙草畑を荒らすのだ。

悪魔は、手をふりながら、睡ねむさうな声で、かう怒鳴つた。寝入りばなの邪魔をされたのが、よくよく癩しやくにさはつたらしい。

が、畑の後へかくれて、容子ようすを窺うかがつてゐた牛商人の耳へは、悪

魔のこの語が、泥烏須ことばの声のやうに、響いた。……

——この畜生、何だつて、己の煙草畑を荒らすのだ。

\* \* \*

\* \* \*

\* \* \*

それから、先の事は、あらゆるこの種類の話のやうに、至極、

円満をはに完つてゐる。即すなはち、牛商人は、首尾よく、煙草と云ふ名を、

云ひあてて、悪魔に鼻をあかさせた。さうして、その畑にはえて  
ゐる煙草を、悉く自分のものにした。と云ふやうな次第である。

が、自分は、昔からこの伝説に、より深い意味がありはしない  
かと思つてゐる。何故と云へば、悪魔は、牛商人の肉体と靈魂と

を、自分のものにする事は出来なかつたが、その代かはりに、煙草は、  
あまね 沿く日本全国に、普及させる事が出来た。して見ると牛商人の救き  
うぼつ 拔が、一面墮落を伴つてゐるやうに、悪魔の失敗も、一面成功  
を伴つてゐはしないだらうか。悪魔は、ころんでも、ただは起き  
ない。誘惑に勝つたと思ふ時にも、人間は存外、負けてゐる事が  
ありはしないだらうか。

それから序ついでに、悪魔のなり行きを、簡単に、書いて置かう。彼  
は、フランスス上人が、歸つて来ると共に、神聖なペンタグラマ  
の威力によつて、とうとう、その土地から、逐おひはら払はれた。が、  
その後も、やはり伊留満のなりをして、方々をさまよつて、歩い  
たものらしい。或記録によると、彼は、南蛮寺の建こんりふ立前後、京



都にも、屢々しばしば 出沒したさうである。松永弾だんじやう 正まをほんろう 翻弄した  
 例の果心居士くわしんこじと云ふ男は、この悪魔だと云ふ説もあるが、これは  
 ラフカディオ・ヘルン先生が書いてゐるから、ここには、御免を  
 蒙かうむる事にしよう。それから、豊臣徳川両氏の外ぐわいけうきんあつ 教禁遏あつに会つ  
 て、始の中こそ、まだ、姿を現はしてゐたが、とうとう、しまひ  
 には、完まつたく日本にゐなくなつた。——記録は、大体ここまでしか、  
 悪魔の消息を語つてゐない。唯、明治以後、再ふたたび、渡来した彼の動  
 静を知る事が出来ないのは、返へす返へすも、遺憾ゐかんである。……

(大正五年十月)



# 青空文庫情報

底本：「現代日本文学大系 ㊦ 芥川龍之介集」筑摩書房

1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行

入力：j.utiyama

校正：吉田亜津美

1998年9月11日公開

2004年3月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# 煙草と悪魔

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>